

旅にしあれば

團伊玖磨

現代のエッセイ

旅にしあれば

團伊玖磨

朝日新聞社

旅にしあれば • 現代のエッセイ

一九八六年一月二十五日 第一刷発行

著 者 團 伊玖磨

発行考 川口信行

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇一七三〇

定 価 一 一 〇 〇 円

旅にしあれば・目次

旅にしあれば 9

I 日本のどこかで

幾夜寝覚めぬ 12

空の青 17

賤しい話 24

横浜中華街 28

三浦三崎 33

かんかん石 44

鳩の灯 50

青頸 58

蛇交記 63

あぶつても 69

花電車 78

無銭旅行 86

与那国紀行 95

東西南北 112

II 世界のどこかで

再会 118

白夜
126

二枚舌
132

R
139

セヴィリヤの春
143

阿蘭陀辛子
151

曾遊
156

消える歌
162

肌
168

*

スワニーの彼方
177

*

堅琴

203

ナン・マドール

212

礁湖

222

熱河行宮

227

「香妃」を追う

238

ライトニング・リッジへの道

252

優柔不断

258

*

解題・辻井 喬

265

裝
釘

多
田

進

旅にしあれば

旅にしあれば

時間の中の旅——音楽——をしながら、空間の中の旅を思う。空間の中の旅をしながら、音の中の旅を思う。そして、その両方の旅の最中に、生きているという旅を思う。

旅には、どんな旅にも出発があり、最中があり、帰還がある。音楽には、開始があり、最中があり、終止がある。そして、生命には出生があり、生きている日々があり、死がある。

皆それは旅だ。

地球の果てを彷徨うのも、近所のスーパーに行くのも、音楽をするのも、日々を生きる事も、僕は旅だと思っている。そして、旅にしあれば、時間は、空間は、総べては美しくありたいと思う。

数限り無い旅が続いた。今も続く。書き記したさまざまな旅の記録から「パイプのけむり」等の既刊のものを主に、忘れ難い三十一篇を撰んでこの書を編んだ。

今、旅の最中にある貴方に、この、旅人の小さな記録を贈りたい。

I 日本のどこかで

幾夜寢覚めぬ

旅の僕の朝は、極く小さな、千鳥の声のような、鈴虫の声のような音で始まる。眠りの靄の中に、遠く雲雀が上がるような、遙かな空高く細い銀の針が飛び交うような音が近付いて来る。ちちち、ちちち、その音が何時の間にか千鳥の声になる。そして鈴虫の声になる。ちちち、ちちち、眠りの靄は晴れて行き、やがて爽やかに光が現われ、温度が現われ、周囲が現われ、自分が現われる。朝だ、何處に居るのだろう、一瞬そう思う。手を伸ばして枕許の眼覚まし時計のアラームのストッパーを押す。雲雀も、銀の針も、鈴虫も、千鳥も瞬時にして消える。飛び起きてパジャマの儘カーテンを開ける。ローマの空が光る。ロンドンの街並みが続く。ニューヨークの摩天楼群が屹立する。ウィーンの窓に雨の雫が伝わる。北京の故宮の屋根がオレンジ色に輝く。ハワイの渚に波が躍る。ダブリンの霧が流れる。ジャカルタの椰子が揺れる。大阪の水が光る。稚内の雪が飛ぶ。長崎の坂道が濡れる。倉敷の白い壁が濠に映る。宍道湖が、洞爺湖が、琵琶湖が、十和田湖が、富士が、阿蘇が、穂高が、川が、沼が、峠が明けて行く。

眼覚まし時計の音が可愛らしく、微かなので、僕の旅の朝は、世界の、日本の、何處でも、爽やかに、そして品好く始まる。この眼覚まし時計は、去年の夏、スコットランドに旅立つ日に、

既に東京に出て来てしまつてから、前に使つていた一件を忘れて来た事に気付いて、芝の東京プリンス・ホテルの地下の時計屋で買ひ求めた精工舎の小さな平型黒仕上げの、クォーツのディジタル時計である。前の眼覚ましも好きだったけれども、この眼覚ましは厚さ八耗、横十糧五耗、縦四糧五耗でポケットに入れても嵩張らないし、それに何よりも気に入つたのがその上品で可愛らしい千鳥か鈴虫の声のようなアラームの音だった。朝の眼覚めは大切である。その大切な朝を、起こせば良いでしょう、起こせば、というような蕪雑なブザーの音や、昔風なじりじりと鳴り渡る野蠻な音で起こされては、音を考える事を仕事としているこちらの一日は台無しになってしまう。良いものを手に入れた。きつとこの品の良い音で迎える旅の朝はこれから一寸質を上げるだろう、そして毎日が心豊かに訪れるだろうと僕は喜んでスコットランドの旅に出た。

去年の夏からは旅ばかりが続いた。スコットランド、イタリア、アメリカ、インドネシア、ハワイ、オーストラリア、中国、アイルランド、再びイタリア、再び中国、三度中国。そして、その間には日本のさまざまな場所に用があつた。その旅の朝々に、この小さな眼覚ましは僕に朝を教え続けた。

朝のアラームは前夜寝る時にセットする。一日が終り、旅舎の一室に孤坐して眼覚まし時計をセットする時、僕はしみじみと旅の孤独を思いながら、何時の頃からか、幾夜寢覚めぬ、という短いセンテンスを口の中で呟くのが習いとなつた。幾夜寢覚めぬ、幾夜寢覚めぬ――。

この句は、言わずと知れた、百人一首にも入っている源兼昌の歌、

淡路島通ふ千鳥の鳴く声に

いく夜寢覚めぬ須磨の閑守

の下の句の前半である。

こうしてセットして置けば、明日の朝も千鳥のような、鈴虫のような、この小さな時計のアラームが僕を眠りから誘い出しに来るのだという思いが、夜の空を渡る千鳥の声に眼を覚ます須磨の関守りの気持ちに通って、何時の間にか、幾夜寢覚めぬ、のセンチンスを口に呟くようになったのだと思うのだが、大して論理的な根拠がある訳では無く、唯、何と無く、幾夜寢覚めぬ、と呟いては眼覚ましのアラームをセットし、又、幾夜寢覚めぬ、と呟いては、確かにアラームがセットされたかどうかを見直すのである。

幾夜寢覚めぬ、

幾夜寢覚めぬ――。

こうしてから夜の眠りに入るので、どうしても眠る前の数分は歌を思ふ事が多い。この幾夜寢覚めぬ、の歌には、この歌を本歌取りして作られたと言われる藤原定家の歌があって、その歌が頭に浮かぶ。

旅寝する夢路はたえぬ須磨の関

通ふ千鳥の曉の声

この方がアラームの音と、その音で眼を覚ますこちらの旅の空の感じには似合う筈なのだが、